ギリシアの初期鉄器時代の遺跡（4）
カラウレイアのポセイドンの聖域

髙橋　裕子

Early Iron Age Sites in Greece（4）
The Sanctuary of Poseidon at Kalaureia

TAKAHASHI Yuko

Fourth in the series “Early Iron Age Sites in Greece,” this paper focuses on the Sanctuary of Poseidon at Kalaureia (Poros). A review of the Late Bronze Age and Early Iron Age finds from the site put great emphasis on the religious features of each period. The Late Bronze Age site of Modi, a small island 1 km east of Poros, and the shipwreck found nearby are also covered.

はじめに

近年初期鉄器時代の宗教や信仰、およびそれに関する施設についての研究は、新たな局面を迎えていると言ってよい。というのも、洞窟聖所などの例外を除いては、ポリス成立期に神殿の建造が始まるまでは宗教関連の遺物や遺構がほとんど存在しないというかつての資料状況が徐々に変化しつつあるからである。

例えばキオス島のカト・ファナの聖域では、初期鉄器時代でも前半期である原幾何学文様期の土器が出土している。もちろん土器が出土しただけではその時期その場所が聖域であったと判断することはできないが[1]、カト・ファナの場合には宗教儀礼における飲酒（葡萄酒）に関連があると推察される土器が優勢であることから既に原幾何学文様期においても聖域であった可能性が高いと見なされている[2]。それのみならず、やはり土器の種類および土製像の存在などから、この聖域における信仰の歴史はさらに古く後期青銅器時代IIIC期にまで遡ることも推察されている[3]。1999年に調査が再開されるまではカト・ファナの聖域の成立は後期幾何学文様期、早くても中期幾何学文様期と見なされていた[4]。それが一気に数世紀も早まったことになる。そしてかかる変化は島全

体の歴史像の修正をも迫ることになった[5]。

確かに今でも大まかな傾向を言えば初期鉄器時代でも後期になって初めて宗教関連の資料が顕著に見受けられるようになるという資料状況に変わりはないが、それでもカト・ファナのようにそれ以前の時期においても聖域である可能性が指摘されるような事例が出てきたことは看過すべきではない。そしてかかる観点から資料を再確認する必要がある遺跡の一つに、ポロス（カラウレイア）島のポセイドンの聖域がある。なぜなら20世紀末から新しい調査が行われ、初期鉄器時代に関する論考も含めて幾つもの報告や研究が発表されており、それらを踏まえた上で聖域の具体像を再構築することが求められているからである。そこで本稿においてはこの遺跡に焦点を当て、後期青銅器時代および初期鉄器時代を中心にその資料状況を検討していきたい。

遺跡の概要

ポロスはサロン湾の南西部に浮かぶ島である。ペロポネソス半島の北東部と接するように位置しており、対岸のガラタスとの距離はとても狭い（図１）。また厳密に言うと大小二つの島々から構成されており、両方あわせて現在ではポロスと呼ばれている（図２）。ポセイドンの聖域（図３）は大きい方の島カラヴリア（古代名ではカラウレイア）の中央部に位置している。そしてこの聖域は古代ギリシア史上、二つの事柄によりよく知られた存在であろう。

一つは、マケドニアに抵抗を試みたデモステネスがその最期を迎えた地であるということである。デモステネスはこの聖域に庇護を求めて逃げ込んでいたが[6]、最終的には服毒により自らの命を絶った（プルタルコス『デモステネス伝』29-30）。さらにパウサニアス（2.33）によれば、ポセイドンの聖域にデモステネスの墓があったという。

もう一つは、この聖域がアンフィクテュオニア（隣保同盟）の中心地であったことである。ストラボン（8.6.14）によれば、ヘルミオネ、エピダウロス、アイギナ、アテネなど７つのメンバーから構成される隣保同盟がポセイドンの聖域には存在した。そのためこの遺跡から発見されたミケーネ時代や初期鉄器時代の資料は、聖域のみならずアンフィクテュオニアの起源という観点からもしばしば議論の対象とされてきた[7]。

このように著名な聖域であったことが影響していると思われるが、17～19世紀にかけてのヨーロッパの旅行家達がこのポセイドンの聖域を訪れた記録が残っている[8]。それのみならず既に1894年には、スウェーデン人の研究者二名（S. Wide,

図１　サロン湾地図（筆者作成）

図２　カラウレイアおよびモディ周辺地図（筆者作成）

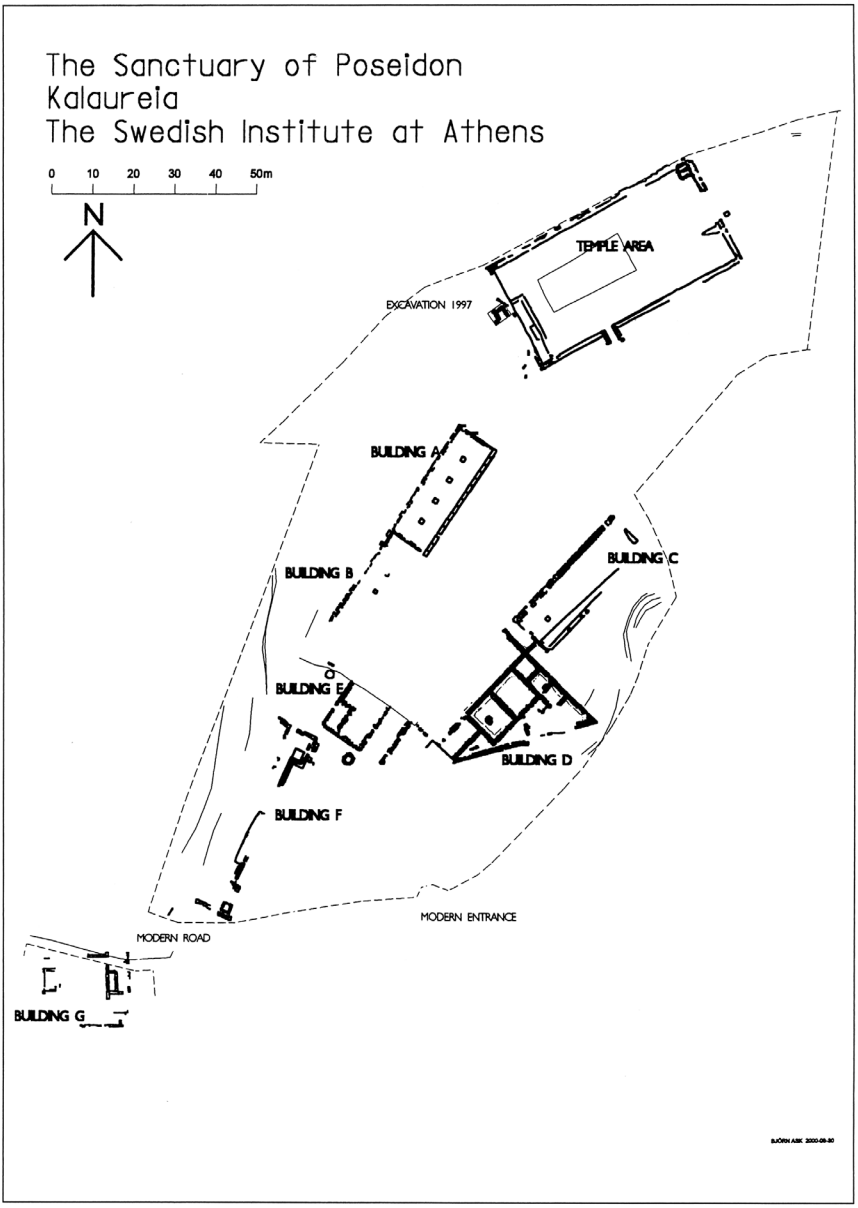

図３　カラウレイアのポセイドンの聖域（出典：Wells 2003, 345, fig.3.）

L. Kjellberg）により発掘が行われた。6月から8月にかけての2か月以上の調査で、神殿を始めとする幾つもの建造物や遺物が出土した[9]。この時の発掘は、写真のネガを今でもドイツの研究所が保有していることからも理解されるように、ドイツの研究機関や研究者の協力のもとに達成された調査であった[10]。それでもこれはスウェーデン人の研究者がギリシアで初めて行った発掘であり、現在ギリシア考古学の世界において他の欧米各国に並ぶ地位を獲得しているスウェーデンが、その最初の一歩を踏み出した記念碑的な野外調査である。

その後もこの遺跡は何人もの研究者の注目を集めてきた。1941年に刊行された『トロイゼンとカラウレイア』を始めとして[11]、カラウレイアやポセイドンの聖域に関しては断続的に研究文献が発表されている[12]。また1978年にはこの場所がギリシア政府により遺跡として整備され、管理されることとなった[13]。しかし本格的な調査は長らく行われないままとなっており、それが果たされたのは最初の発掘から1世紀以上の年月が経過した20世紀の末になってからである。B・ウェルズを中心としたスウェーデンの調査チームが組織され、1997年から新しい発掘が開始された。土壌や植物および動物遺存体の分析[14]、地球物理学的調査[15]などを含めた包括的な研究により、聖域における当時の人々の具体的な活動実態を明らかにすることが目的とされている。途中ウェルズが死去するという悲劇に見舞われながらも未だ調査は継続されており[16]、その成果は多岐にわたっている[17]。

それらの調査結果によると、この遺跡の歴史は初期青銅器時代にまで遡ることが確認されている[18]。続く中期青銅器時代[19]、そして後述するように後期青銅器時代の遺物も出土しているが、ただしミケーネ時代をも含めて青銅器時代に関しては未だ不明なことが多い。資料が増加していくのは初期鉄器時代の後期以降であり、後期幾何学文様期には聖域として機能していたと推測されている。そして続く前古典期に入ると大規模な発展の痕跡がうかがわれるようになる。ただし関連文献を読んでいてやや不思議に感じることは、前古典期[20]やヘレニズム時代[21]に比して古典期の資料が多くはないことである。事実発掘報告にも、理由は不明であるがカラウレイアにおいては概して前5世紀の土器片が少ないと記されており[22]、今後の調査で解明が期待される問題の一つであろう。

それでは以下、初期鉄器時代前半期の宗教活動の有無、さらには青銅器時代から初期鉄器時代にかけての宗教や聖域の連続性というテーマを念頭に置きつつ、まずは後期青銅器時代について、そのあと初期鉄器時代の資料について紹介していくことにしよう。

後期青銅器時代

（１）ミケーネ時代

ミケーネ時代に関しては、既に1894年の調査で遺物が発掘されている[23]。土器や金属製品のみならず、エジプトからの搬入品も出土していることは特筆にあたいしよう。紅玉髄の印章でファラオがチャリオットに乗っている場面が描写されており、反対側の面にはカバが表現されている。エジプトの第18王朝の製品であり[24]、貴重な搬入品として珍重されたことは想像に難くない。

これらのミケーネ時代の遺物が宗教関連のものか否か、換言すればミケーネ時代にこの遺跡が聖域であったか否かという問題に関しては、研究者の間で見解が分かれている。これらの遺物は元来は墓の副葬品であったという意見もあれば[25]、宗教関連の製品である可能性を考慮する論文も提出されており[26]、統一した見解は得られていない。

新しい調査でもミケーネ時代の遺構は発見されておらず、この時代の具体像は未だ多くが不明である。ただし多量とは言えないが土器片の出土数は増加しており[27]、とりわけ調査区H（Area H）から発掘された土製動物像や両手を上げた女性土製像（ψタイプのフィギュリン）は注目されよう[28]。これらの資料は当該期のこの遺跡が居住地であり、さらに聖所も存在した可能性を示唆しているのかもしれない[29]。

最後にポセイドンの聖域の内部ではないが、また詳細は不明であるが、後期青銅器時代の可能性がある墓として、ポロスの町からポセイドン神殿へといたる道路の東側に横穴墓（岩室墓）が発見されたことを記す文献があることを付言しておきたい。後期青銅器時代における島全体の具体像の解明が期待される[30]。

（２）レシェフ像

2007年、神殿の南東方向にある調査区（Area H002）から、小型の青銅製像が発見された（図４）。高さは15.5cmで右手を上げており、おそらくシリアおよびパレスチナ地方で生産されたレシェフ像と判断されている[31]。形態的な特徴から制作された時期は後期青銅器時代と推測されているが、しかし発見されたのはヘレニズム時代の層位であった。そのためいつの時期にカラウレイアに運ばれてきたのか、またどのような経緯を経てそこに埋められることになったのか、疑問が呈されることになった[32]。

この問題に関しては多様な可能性が考えられるが、想定されうる主要な見解は下記の二つであろう。一つ目は、後期青銅器時代に持って来られて、それがヘレニズム時代の層位に混入したという意見である。そして二つ目は、制作されてから千年前後経過したヘレニズム時代になってから、この島へもたらされたという意見である。このレシェフ像についての詳細を報告したウェルズは、前者の説を採用している。というのも、この像が発見された場所はヘレニズム時代の建築活動によって掘り起こされており、色々な時代の遺物が含まれていたからである[33]。

図４　レシェフ像（出典：Wells with Karydas 2009, 144, fig.1.）

そして筆者も、その意見に賛成である。その理由は、上述のような出土層位の特徴のみならず、レシェフ像が発見された他の遺跡の年代にある。たとえばメロス島のフィラコピ[34]やクレタ島のパッツォス[35]など、ギリシアではこの遺跡以外からもレシェフ像の出土例が報告されている。そしてそれらが後期青銅器時代や初期鉄器時代、前古典期のコンテクストにおいて発見されていることを考えるならば[36]、カラウレイアの場合もヘレニズム時代ではなく、後期青銅器時代にこの島に持って来られたと考える方が適切であろう。

おそらく後期青銅器時代の遅い時期にレシェフ像はカラウレイアに持って来られたと推測されるが、ウェルズは形態的特徴が近いフィラコピの事例を踏まえた上で、後期青銅器時代IIIBもしくはIIIC期にもたらされた可能性を示唆している[37]。そしてカラウレイアで信仰の対象とされたあと、いつの時期かは不明であるが廃棄された。最終的にはヘレニズム時代の建築活動により、その時代の層位に混入されたと解釈されよう[38]。

（３）後期青銅器時代IIIC期

ミケーネ文化崩壊後の後期青銅器時代IIIC期に関しては、1997年の調査で重要な成果が得られた。神殿の西隣の場所で3.5（南北方向）×4.5（東西方向）mという小さな区画が発掘され、それまで確認されていなかった当該期の建築遺構が発見されたからである（図５）。コの字の様な形に三辺の壁で囲まれた遺構で、複数の部屋から構成される建造物の一部である。壁の厚さは60cm前後で30～50cmほどの石で構築されており、隙間は小型の石で埋められていた。出土土器の時期から判断して、後期青銅器時代IIIC期の中期から後期に属すると結論されている。後期青銅器時代の最終末期に使用されたあと、この建物は暴力的な出来事により破壊されたわけではなく、単に放棄されてその終焉を迎えたらしい[39]。

この建造物の遺物で注目すべきは、調査区画の南西隅に出土した大型の石である。表面が水平になるように、複数の小型の石によって支えられていた。またこの石周辺の床面からは脂肪分の多い土壌が検出されており、そこからは貝殻や骨、おそらく灰、さらに他の場所よりも多量の土器が発掘された。かかる事実から、この石はテーブルとして使用され、食事もしくは犠牲の儀式が行われた痕跡であると推察されている。とすると、おそらくこの場所は宗教施設であったと見なし得る[40]。当該期の宗教関連遺構として稀有な事例と言えるであろう。

また聖域内の他の場所からも後期青銅器時代IIIC期の遺物が出土している[41]。

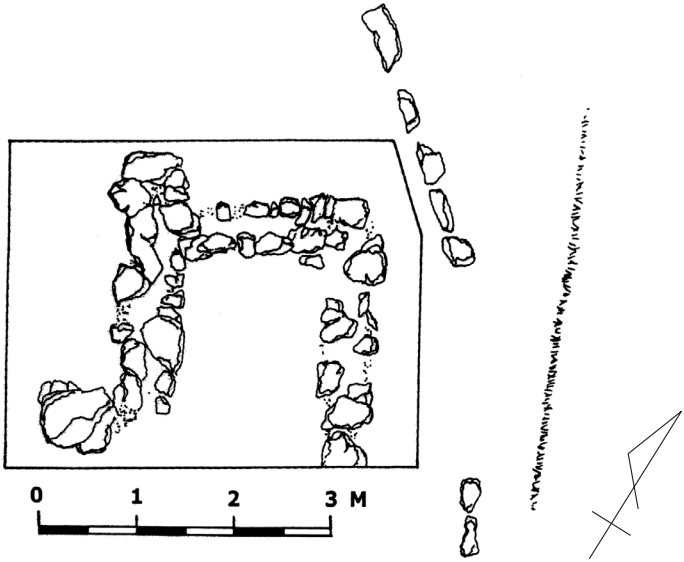

図５　後期青銅器時代ⅢC期の遺構（出典：Wells 2003, 346, fig.4. 方位は筆者加筆）

これらの資料からは、この遺跡のⅢC期におけるある程度の人的活動を想定することが可能であろう。

（４）モディ島とその周辺海域

上記のカラウレイアの資料に関しては、周辺地域をも視野に入れた検討が必要である。というのも、現在は無人島である近隣のモディから後期青銅器時代ⅢC期の重要な遺跡が発見されているからである。

ポロス島から１km前後東方に浮かぶモディは北東から南西へとのびる細長い形をしており、全長は950m前後、幅は最も広い場所でも300mを超えることがないという小規模な島である（図２）。にもかかわらず、初期青銅器時代や後期青銅器時代、古典期やヘレニズム時代など様々な時代の資料が発見されており、考古学的には重要な場所である。後期青銅器時代に関しては、表面採集および発掘調査の成果によると、ミケーネ時代の後期であるⅢB2期においても居住されていたことが確認されているが、むしろ資料の中心はⅢC期の初期および中期であり、それはすなわちミケーネ文化が崩壊してからの方が活発な人的活動が展開されたことを物語っている。

そしてこのモディで発見された重要資料の一つに、「絵画様式（pictorial style）」の土器片がある。時期は後期青銅器時代IIIC期に属し、器形は大型の鉢状容器（クラテール）である（図６）。３つの破片から構成されており、すべて合わせても高さ15cm、幅14cmという小さな部分しか残っていないが、二人の戦士が左に進む姿が表現されている。間違いなくミケーネ出土の「戦士の土器」を彷彿とさせる図柄であろう[42]。おそらくは他地域へと搬出されるために、アルゴリス地方のどこかの工房からモディへと運ばれてきたものではないかと推測されている[43]。

またクレタの製品の一部も発見されていることから、この島がクレタとも接触を持っていたことも明らかとなっている[44]。そしてこれらの資料はモディの人々が交易活動を展開していたことを推測させる。ミケーネ文化が崩壊して社会および交易システムが大きく変化したことが、むしろモディの繁栄に寄与した可能性を推察できるかもしれない。

さらにこのモディに関しては、水中考古学の分野からも重要な収穫があった。島の西方の海中から沈没船が見つかり、ギリシアの調査チームが発掘を行ったところ、輸送用の土器や金属製品などが発見された（図２）。中にはやや意外なものも含まれており、土製像（フィギュリン）の破片２個も発掘されている。

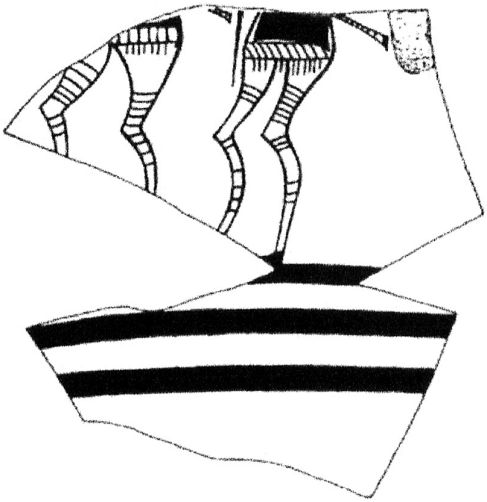

図６　モディ出土の絵画様式の土器片
（出典：Κονσολάκη - Γιαννοπούλου 2019, 64. fig.18.）

それらは交易のための積み荷であったのか、それとも、一般に宗教的性格を有すると見なされている品であることから、船員が安全な航海を願うために所有していたものなのか、多様な解釈が可能であろう[45]。また発見された遺物からこの船の時期は後期青銅器時代IIIB ～ IIIC期と判断されており、モディ島内の遺跡の年代と符合する。明らかにモディの居住者達が交易に携わっていたという見解を補強する資料である[46]。

そしてこれら一連の資料は、おそらく上述のレシェフ像を始めとするカラウレイアの遺物を検討する上でも重要な意味を持つ。後期青銅器時代の後期もしくは終末期のカラウレイアは孤立した状態にあったわけではなく、モディや対岸のガラタス[47]を始めとする周辺一帯との連関の中に存在していた。それらの資料状況の中にカラウレイアを位置づける視座が求められている。

初期鉄器時代

（1）亜ミケーネ期～中期幾何学文様期

管見の限り現今の公表資料においては、亜ミケーネ期に関する報告は見当たらない。

続く原幾何学文様期に関しては、後代に建てられた建造物Dから土器片が数個出土している[48]。さらにこの遺跡からは、初期幾何学文様期や中期幾何学文様期の土器片も発見されているが、ただしいずれの時期に関しても遺物量は少ない[49]。したがって原幾何学文様期から中期幾何学文様期までは過疎化していた可能性が高く、また人的活動の詳細も不明である。必然的な結果として、それらの時期にこの遺跡が既に聖域であったか否かという問題に関しては、現段階では断定的な結論を出すことは不可能である。

（2）後期幾何学文様期

後期幾何学文様期になると資料が急増し、それ以前とは様相が一変する。既に1894年の調査でこの時期の土器や金属製品が出土しており、例えばその中の一つに馬形の青銅像がある（図７）。大きさは頭部までの高さが6.7cm、長さが７cmで、時期は前８世紀の後期と判断されている[50]。一般に青銅製馬形像は当該期における奉納品の一つとして知られているものであり[51]、断定はできないが、これも宗教関連の品である可能性は否定できまい。

新しい調査ではさらに資料数が増加しており、とりわけ後代に建てられた建

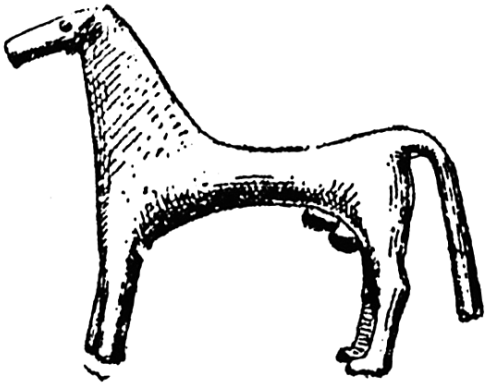

図７　幾何学文様期の馬形青銅像（出典：Wide & Kjellberg 1895, 308, fig.25.）

造物Dがある場所からは注目すべき成果が得られている[52]。というのも初期鉄器時代に属する層位が確認されたのみならず[53]、建物の一部（Wall 09）やピット３つ（Features 07、08、09）が出土したからである[54]（図８）。ピットは３つ全てが同じ時期に作られたもので、その内２つ（Features 08、09）は後の時代の建築活動によって破壊されていた[55]。残る一つ（Feature 07）は円形で深さは20cmほどであり、上部には石が配されていた。さらにその上に初期鉄器時代の建物が建てられ、その一部の壁（Wall 09）や床面（Stratum 6）が検出された。ただし遺構はごく小規模にしか残っておらず、建物全体の形状は不明である[56]。

遺物に関して言えば、３つのピット内部およびこの一帯の初期鉄器時代の層位から出土した土器片の多くは後期幾何学文様期で、とりわけ前８世紀の第３四半世紀のものである。さらには、下記のように、特筆すべき遺物が二種類含まれていた。

まず一つ目が、後期青銅器時代IIIC期の土器片である。後期幾何学文様期の遺物の中に、数百年も前の後期青銅器時代IIIC期に属するクラテール６個の破片が例外的に含まれていた（図９）。それらのクラテールの直径は最小のものでも29cm、最大のものでは54cmもあり、大型で秀逸な製品である。調査を指揮したウェルズはそれらのクラテールについて、既に破片であったものが偶然に混入したわけではなく、初期鉄器時代に器としての形状を保った状態で存在していたという見解を示しており、筆者もその可能性が高いと考えている。なぜなら、いつの時期の出来事かは不明であるが、２個のクラテールには修復の

ための穴が穿たれており、破損しても廃棄されることなく保有され、貴重な品として丁重に扱われた痕跡が残されているからである。後期幾何学文様期の人々が、後期青銅器時代IIIC期の土器を古に由来する宝物と見なしていた可能性が推察されよう[57]。

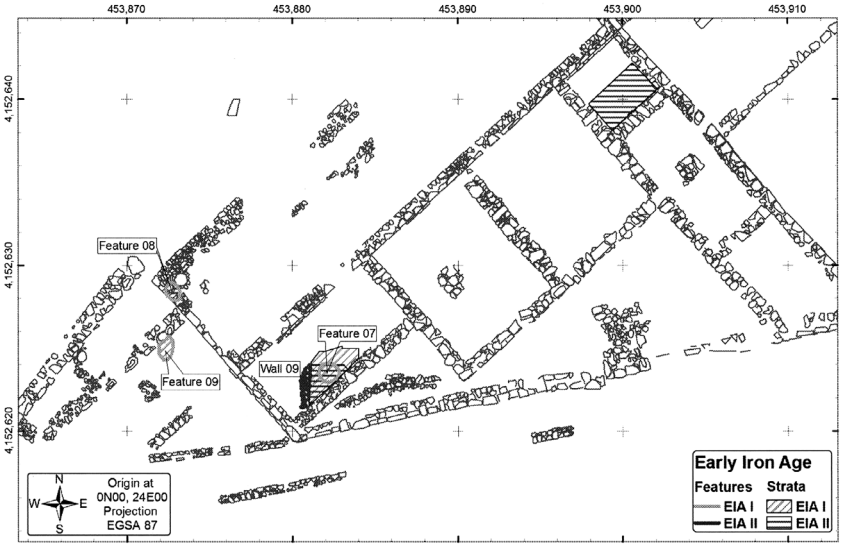

図８　建造物D一帯の初期鉄器時代の遺構
（出典：Wells, Penttinen, Hjohlman with Göransson, Karivieri & Trifirò 2006-2007 (2008), 46, fig.18.）

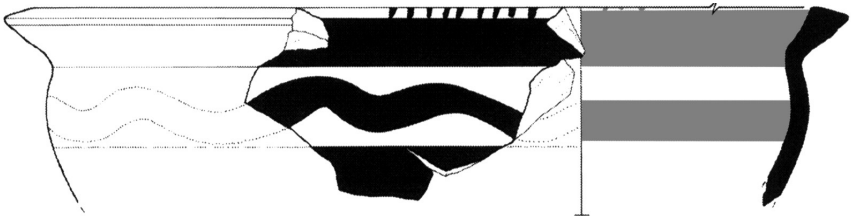

図９　後期青銅器時代ⅢC期の土器
（出典：Wells, Penttinen, Hjohlman with Göransson, Karivieri & Trifirò 2006-2007 (2008), 52, fig.25, no.12.）

次にアッティカ製の土器である（図10、11）。後期幾何学文様期のアッティカ製のアンフォラ５個の破片で[58]、その内４個はとりわけ大型の部類に属する。中には胴部の直径が70cm、頸部の長さが40cmと推計されるものもあるという[59]。かかるアッティカ製の大型土器は高価で貴重な品であり、カラウレイアの人たちにとっては重要な威信財であったことは想像に難くない。それではその用途についてであるが、当該期のアッティカにおいてこの種のタイプの土器は一般に墓碑として使用されていた。しかし今のところこの遺跡からは初期鉄器時代の墓の存在は確認されておらず、別の用途で使われていたと考えられる。事実土器内部から検出された物質に関して成分分析が行われたところ、マメ科の植物が入れられていたことが明らかとなっている。ウェルズが指摘しているように、おそらくは饗宴などに使用された可能性が推察されよう[60]。

さらに建造物D一帯から出土した初期鉄器時代の遺物の中には、アッティカ製のみならずコリントス、アルゴリス、キクラデス、そしてロドスのものと推測される土器片も発見されている[61]。

これらの資料が出土していることを踏まえて考えると、後期幾何学文様期のこの場所はどのような機能を有していたと結論できるであろうか。おそらくは聖域であったと思われる。貴重なアッティカ製の大型土器をはじめとする豊富な搬入品は、日常生活を送るための居住の場というよりは、何らかの特別な場所であったことを示唆している。となると最も有力な候補は、聖域であろう。さらにかかる意見を補強してくれるのが、ヤギの骨が出土していることである。おそらく犠牲にされたものと推察されており、宗教儀式が執り行われたことを示唆している[62]。

後期幾何学文様期においてこの場所が聖域であったとすると、それではいずれの神が祀られていたのであろうか。残念ながらその問題に関する手掛かりは今のところ存在せず、後代と同様にポセイドンに対する信仰の場であったか否かは不明である。現今の資料状況においては、この時期にどの神が祀られていたのかという問題に関しては、明確な答えを導き出すことは不可能である[63]。

最後に、新しい調査の成果によると、建造物D以外の場所からも初期鉄器時代の資料が出土していることを付け加えておきたい[64]。たとえば建造物C一帯からもこの時代の遺物が発見されており[65]、その中にはアルゴリス製の可能性がある土器片も含まれている[66]。また神殿の南東方向に位置する調査区Hからも、当該期の遺物が発掘されている[67]。さらには、後期幾何学文様期もしくは前古典期と推測される遺物であるが、神殿西側の後期青銅器時代IIIC期の聖所

が発見された場所からは馬型土製像が発掘されていることも付け加えておきたい[68]。これらの資料は、この遺跡全体における後期幾何学文様期のある程度活発な人的活動を示唆していよう。

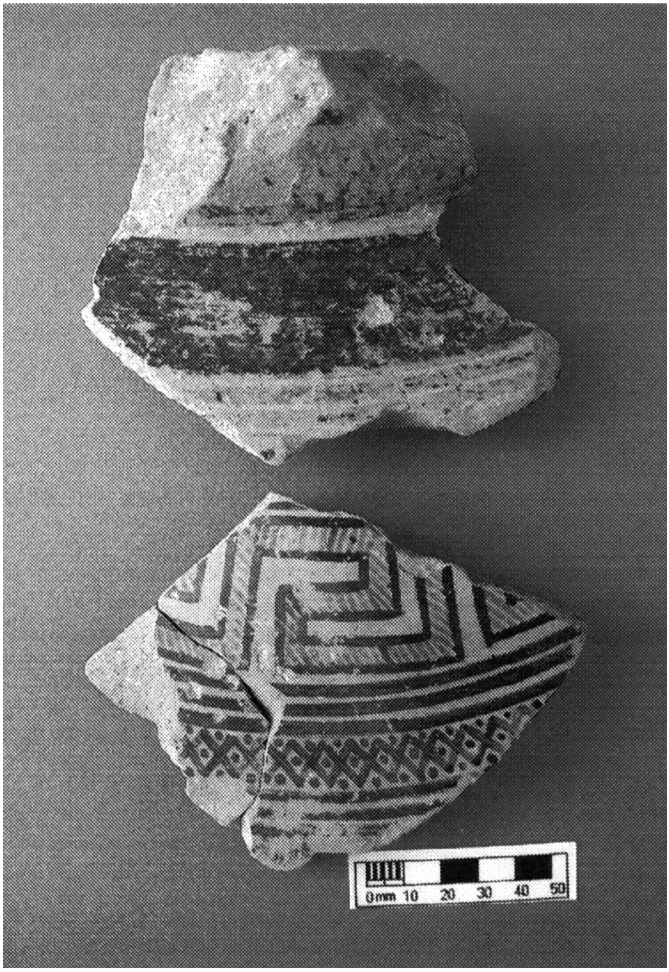

図10　アッティカ製の土器
（出典：Wells, Penttinen, Hjohlman with Göransson, Karivieri & Trifirò 2006-2007 (2008), 62, fig.33.）

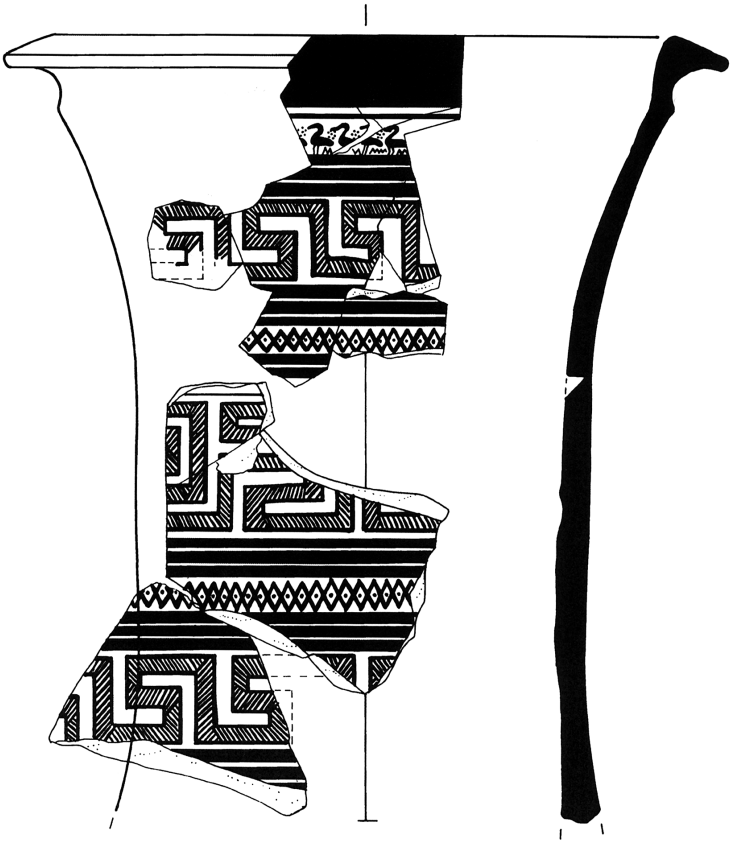

図11　アッティカ製の土器
（出典：Wells, Penttinen, Hjohlman with Göransson, Karivieri & Trifirò 2006-2007 (2008), 65, fig.35, no.57.）

おわりに

カラウレイアのポセイドンの聖域における宗教活動について、簡潔にまとめてみよう。

まずミケーネ時代については、現段階では確実なことは不明である。現時点での知見によれば、最初に確認される明確な宗教関連資料はミケーネ文化崩壊後の後期青銅器時代IIIC期のものであろう。神殿の西隣の調査区からそれが出土している。ただしこの時期の宗教行為が、後の時代のものと同一の性質ない

しは特徴を有していたかというと、おそらくはそうではないであろう。初期鉄器時代に入ってからもそこがそのまま連綿と宗教活動のための場として機能していたことは確認されておらず、IIIC期の宗教活動は後代のそれとは異質のものであると見なされる。

初期鉄器時代に関しては、その前半期については資料が僅少でありかなり過疎化していた可能性が高い。中期幾何学文様期までは、この遺跡で宗教活動が行われていたか否かは不明である。

再び宗教関連資料が見出されるようになるのは、初期鉄器時代でも遅い時期、すなわち後期幾何学文様期に入ってからである。後代の建造物D一帯での調査により宗教活動の存在が推測されており、全体的な形状は不明であるが当該期の建物も発掘されている。またこの時期に関しては、エーゲ海周辺各地の搬入土器も発見されていることは注目に値しよう。それらの地域の人々がこの聖域を訪れていたかどうかは不明であるが、少なくともこの聖域に集った人々が他地域との接触や交流を有していたことは確かである。おそらくこの頃に本格的に聖域として発展し始めたのではないかと思われる。ただしこの後期幾何学文様期における信仰の対象がどの神であったのかは、今のところ不明である。

このように近年の調査によってもポセイドンの聖域における初期鉄器時代の宗教活動に関しては、後期幾何学文様期になるまでは確認されていない。当然のことながら現今の資料状況においては、青銅器時代以来の宗教や信仰、さらには聖域の連続性を認めることは不可能である。確かに本稿冒頭にて言及したように、初期鉄器時代の宗教活動に関しては近年新しい知見がもたらされるようになってはいる。しかしこの時代の後期に神殿が建造されるようになるまでの宗教行為に関しては未だ不確かなことが多く、現在においても慎重な検討が求められている[69]。本稿で扱ったポセイドンの聖域の調査は、あらためてそのことを認識させる事例である。

この遺跡の調査は、未だ継続中である。今後もその成果を注視していきたい。

1　必ずしも初期鉄器時代に焦点を当てているわけではないが、その物質資料が宗教関連のものか否かをいかに検討するかという問題を扱っており、なおかつ本稿の対象であるカラウレイアのポセイドンの聖域を事例研究として取り上げている論考として、Pakkanen 2015.

2　Beaumont 2011, 223.

3 Beaumont 2011, 222-224.
4 Beaumont 2011, 222.
5 Beaumont 2011, 224.
6 古代ギリシアにおける聖域のかかる機能に関しては、Sinn 1993.
7 聖域およびアンフィクテュオニアの起源に関しては、Harland 1925, Kelly 1966, Snodgrass 1971, 402, Foley 1988, 148-149, Schumacher 1993, 76, Mazarakis Ainian 1997, 322, Hägg 2003, Coldstream 2008, 343.
8 Wells, Penttinen & Billot 2003, 32-33.
9 Wide & Kjellberg 1895. この時の発掘や調査者に関する文献として、cf. Hägg 2002, 9-10, Nordquist 2002, Wells, Penttinen & Billot 2003, 33-35, Berg 2013, Berg 2016.
10 Wells 2003, esp. n.4, Wells, Penttinen & Billot 2003, 33-34.
11 Welter 1941.
12 研究史に関しては、cf. Wells 2011, 211.
13 Wells, Penttinen & Billot 2003, 35.
14 Mylona 2013, Mylona, Ntinou, Pakkanen, Penttinen, Serjeantson & Theodoropoulou 2013, Mylona 2015, Penttinen, A. & D. Mylona 2019, Mylona 2019, Syrides 2019, Sarpaki 2019, Lymberakis & Iliopoulos 2019, Ntinou 2019.
15 Papadopoulos, Sarris, Kokkinou, Wells, Penttinen, Savini, Tsokas & Tsourlos 2006.
16 Penttinen & Wallensten 2014.
17 調査に携わっている研究者が発掘報告以外に発表した論考としては、たとえば下記のものがある。Pakkanen 2008, Pakkanen 2011.
18 Wells, Penttinen & Billot 2003, 43, no.1, 46, nos.17-18, 53, 66, 79, Wells, Penttinen, Hjohlman & Savini with Göransson 2005, 161, 190, 201, Penttinen & Wells with Contributions by Mylona, Pakkanen, Pakkanen, Karivieri, Hooton & Savini and with an Appendix by Theodoropoulou 2009, 119, 126-127.
19 Wells, Penttinen, Hjohlman & Savini with Göransson 2005, 190.
20 前古典期に焦点を当てた報告論文として、Pakkanen 2009, Alexandriou 2013.
21 ヘレニズム時代に焦点を当てた報告論文として、Papazarkadas & Wallensten 2020.
22 Penttinen & Wells with Contributions by Mylona, Pakkanen, Pakkanen, Karivieri, Hooton & Savini and with an Appendix by Theodoropoulou 2009, 113.
23 Wide & Kjellberg 1895, 297-302, Hägg 2003, 334-335. Cf. Wells, Penttinen & Billot 2003, 79.
24 Wide & Kjellberg 1895, 300-302（fig.20）, Pendlebury 1930, 67, Cline 1994, 150, No.150, Hägg 2003, 335.
25 Kelly 1966, 116.
26 Hägg 2003. この論文の中においてヘイグは、ミケーネ時代の宗教活動はそれ以降の時代のものとは別個のものであり、ミケーネ時代だけのものであるという考えを示している。
27 Wells, Penttinen & Billot 2003, 46, Wells, Penttinen, Hjohlman & Savini with Göransson 2005, 141, 154, 190, 192, 201, Wells, Penttinen, Hjohlman with Göransson, Karivieri & Trifirò 2006-2007（2008）, 84, 113, Wells 2011, 212.
28 Penttinen & Wells with Contributions by Mylona, Pakkanen, Pakkanen, Karivieri, Hooton

& Savini and with an Appendix by Theodoropoulou 2009, 112, no.54, 113, no.55, 114, 131.

29 Penttinen & Wells with Contributions by Mylona, Pakkanen, Pakkanen, Karivieri, Hooton & Savini and with an Appendix by Theodoropoulou 2009, 131.

30 Hope Simpson & Dickinson 1979, 55, A36.

31 レシェフに関しては、cf. Byrne 1991, 182-185.

32 Wells with Karydas 2009, 143.

33 Wells with Karydas 2009, 147. 当該区域の調査の詳細に関しては、cf. Penttinen & Wells with Contributions by Mylona, Pakkanen, Pakkanen, Karivieri, Hooton & Savini and with an Appendix by Theodoropoulou 2009, 109-115 (esp.110).

34 フィラコピからは２個出土している。Renfrew 1985, 303-310, cf. Byrne 1991, 92.

35 Kourou-Karetsou 1994, 118, no.79, cf. Byrne 1991, 83. 邦語文献として、拙稿「クレタ島パッツォス遺跡における『暗黒』の時代―ギリシア初期鉄器時代の一聖所」『古代文化』第50巻第２号、1998年、22頁。

36 Renfrew 1985, 306-309, Byrne 1991, esp. 239, Cline 1994, 133-134, Wells with Karydas 2009, 143.

37 Wells with Karydas 2009, 143, 147.

38 Wells with Karydas 2009, 147. Cf. Penttinen & Wells with Contributions by Mylona, Pakkanen, Pakkanen, Karivieri, Hooton & Savini and with an Appendix by Theodoropoulou 2009, 131.

39 Wells, Penttinen & Billot 2003, 41-49, 79, Wells 2003, 339, Wells 2011, 212.

40 Wells 2003, Wells 2011, 212.

41 Wells, Penttinen, Hjohlman & Savini with Göransson 2005, 154-155, Penttinen, Wells, Penttinen, Hjohlman with Göransson, Karivieri & Trifirò 2006-2007 (2008), 84, Penttinen & Wells with Contributions by Mylona, Pakkanen, Pakkanen, Karivieri, Hooton & Savini and with an Appendix by Theodoropoulou 2009, 116, no.60, 118-119.

42 ミケーネ出土の戦士の土器の写真が掲載されている邦語文献として、拙稿「青銅器時代終末期におけるミケーネ」『西洋史研究』新輯第44号、2015年、75頁、図１。

43 Κονσολάκη - Γιαννοπούλου 2001, Κονσολάκη - Γιαννοπούλου 2003, 419-420, Κονσολάκη - Γιαννοπούλου 2019, 61-62. さらに筆者未見の文献として、Κονσολάκη - Γιαννοπούλου 2007.

44 Κονσολάκη - Γιαννοπούλου 2003, 420, Κονσολάκη - Γιαννοπούλου 2019, 61.

45 Agouridis & Michalis 2021, 37-38.

46 Agouridis 2011, Agouridis 2012, Agouridis & Michalis 2017, Agouridis & Michalis 2021, cf. Geraga, M. *et al*. 2017.

47 ガラタスに関しては、拙稿「ギリシアのアルゴリスにおける後期青銅器時代IIIC期から原幾何学文様期にかけての埋葬資料」『マテシス・ウニウェルサリス』第21巻第２号、2020年、251-252頁。

なお、252頁４行目の“資料は確認されない”という文言は、検討すべき（または、検討可能な）資料は存在しない、という意味である（アパシアからはIIIC期の土器が出土したという記載はあるが、詳細は不明であるため）。

48 Wells, Penttinen, Hjohlman & Savini with Göransson 2005, 154, 157, 159, Wells 2011, 202.
49 Wells, Penttinen, Hjohlman with Göransson, Karivieri & Trifirò 2006-2007 (2008), 70, Wells 2011, 212.
50 Wide & Kjellberg 1895, 308-309, Wells 2011, 213. Cf. Coldstream 2008, 405.
51 Coldstream 2003, 332.
52 建造物Dの年代は、北側部分は前６世紀後期、南側の拡張部分は前４世紀後期である（Wells, Penttinen & Billot 2003, Wells, Penttinen, Hjohlman & Savini with Göransson 2005, 135, Wells (edited by Pakkanen, Penttinen & Pakkanen) 2015, 139)。
53 建造物D周辺の資料に関しては、Wells, Penttinen, Hjohlman with Göransson, Karivieri & Trifirò 2006-2007 (2008), 34-99.
54 Wells, Penttinen, Hjohlman with Göransson, Karivieri & Trifirò 2006-2007 (2008), 44, 45.
55 Wells (edited by Pakkanen, Penttinen & Pakkanen) 2015, 140.
56 Wells, Penttinen, Hjohlman with Göransson, Karivieri & Trifirò 2006-2007 (2008), 44, 45, 48-50, Wells (edited by Pakkanen, Penttinen & Pakkanen) 2015, 139-142.
57 Wells, Penttinen, Hjohlman with Göransson, Karivieri & Trifirò 2006-2007 (2008), 50-54, 68-71, Wells 2011, 213-214, Wells (edited by Pakkanen, Penttinen & Pakkanen) 2015, 145.
58 ただしその内１個はピュクシスの可能性がある（Wells (edited by Pakkanen, Penttinen & Pakkanen) 2015, 143)。
59 Wells (edited by Pakkanen, Penttinen & Pakkanen) 2015, 143.
60 Wells, Penttinen, Hjohlman with Göransson, Karivieri & Trifirò 2006-2007 (2008), 53-54, 58-71, Wells 2011, 214, Wells (edited by Pakkanen, Penttinen & Pakkanen) 2015, 143-144.
61 Wells, Penttinen, Hjohlman & Savini with Göransson 2005, 150, 154-155, 158, 182, Wells, Penttinen, Hjohlman with Göransson, Karivieri & Trifirò 2006-2007 (2008), 71, Wells 2011, 215. さらに、cf. Wells, Penttinen & Billot 2003, 60, 79.
62 Wells (edited by Pakkanen, Penttinen & Pakkanen) 2015, 142. この場所から出土した動物遺存体に関しては、cf. Mylona 2019, 174-180.
63 Wells 2011, 215, Wells (edited by Pakkanen, Penttinen & Pakkanen) 2015, 145.
64 特に記載が無い場合には、初期鉄器時代でもおそらく後期幾何学文様期であろう。
65 Wells, Penttinen, Hjohlman & Savini with Göransson 2005, 201, Wells, Penttinen, Hjohlman with Göransson, Karivieri & Trifirò 2006-2007 (2008), 113.
66 Wells, Penttinen, Hjohlman & Savini with Göransson 2005, 191.
67 Penttinen & Wells with Contributions by Mylona, Pakkanen, Pakkanen, Karivieri, Hooton & Savini and with an Appendix by Theodoropoulou 2009, 94, 96, 98, 100-101, 110, 112-113, 116, 128, 131.
68 Wells, Penttinen & Billot 2003, 48, no.39.
69 筆者は別稿にて、初期鉄器時代の土製品で一般に玩具と見なされている資料を扱ったことがある（拙稿「ギリシアの初期鉄器時代における車輪付き土製品とその社会的背景」

『地中海学研究』43、2020年、31-53頁）。その中には、未だ神殿の存在が確認されていない原幾何学文様期の遺物も含まれていた。また扱った資料の出土遺構に関して述べると、最も多いのは墓であった。にもかかわらず査読の所見においてそれらの遺物は宗教関連の品であるという通説とは異なる解釈が提示され、しかもそれに際して一切の根拠が示されていなかった。このように何の理由も説明せずに、とりわけ神殿が確認されていない初期鉄器時代前半期の資料を、宗教関連のものと見なす姿勢に対しては、厳しい批判の目が向けられることは免れ得ないであろう。この点に関しては、拙稿「ギリシアの初期鉄器時代における車輪付き土製品とその社会的背景」『地中海学研究』43、2020年、48頁、註88。

文献一覧

Agouridis, C. S. 2011: The Late Bronze Age Shipwreck off the Islet of Modi (Poros), *Skyllis* 11 (2), 25-34.

——— 2012: Ενάλια Αρχαιολογική Έρευνα στον Αργοσαρωνικό, 2006-2007, *Ενάλια* XI, 70-85.

Agouridis, C. & M. Michalis 2017: Ενάλια Αρχαιολογική Έρευνα στον Αργοσαρωνικό, 2009: Ανασκαφή Μυκηναϊκού Ναυαγίου στη Νησίδα Μόδι, *Ενάλια* XII, 76-95.

——— 2021: The Arduous Voyage of Underwater Research on the LBA Shipwreck off Modi Islet, in S. Demesticha & L. Blue eds., *Under the Mediterraean* I: *Studies in Maritime Archaeology*, Leiden.

Αλεξανδρή, Α. & Ι. Λεβέντη eds. 2001: *Καλλίστευμα: Μελετές προς Τιμήν της Όλγας Τζάχου- Αλεξανδρή*, Αθήνα.

Alexandriou, A. 2013: Archaic Pottery and Terracottas from the Sanctuary of Poseidon at Kalaureia, *Opuscula* 6, 81-150.

Beaumont, L. A. 2011: Chios in the "Dark Ages": New Evidence from Kato Phana, in Mazarakis Ainian ed. 2011, 221-231.

Berg, I. 2013: Dumps and Ditches: Prisms of Archaeological Practice at Kalaureia in Greece, in A. Källén ed., *Making Cultural History: New Perspectives on Western Heritage*, Lund, chap.15, 173-183.

——— 2016: *Kalaureia 1894: A Cultural History of the First Swedish Excavation in Greece*, Stockholm Studies in Archaeology 69, Stockholm.

Byrne, M. 1991: *The Greek Geometric Warrior Figurine: Interpretation and Origin*, Archaeologia Transatlantica X, Louvain-La-Neuve & Providence (Rhode Island).

Cline, E. H. 1994: *Sailing the Wine-Dark Sea: International Trade and the Late Bronze Age Aegean*, BAR International Series 591, Oxford.

Coldstream, J. N. 2003: *Geometric Greece*, Second edition, London & New York.

——— 2008: *Greek Geometric Pottery: A Survey of Ten Local Styles and their Chronology*, Updated Second edition, Exeter.

Foley, A. 1988: *The Argolid 800-600 B.C.: An Archaeological Survey - Together with an Index of Sites from the Neolithic to the Roman Period*, Göteborg.

Geraga, M. *et al*. 2017: Palaeoenvironmental Implications of a Marine Geoarchaeological Survey Conducted in the SW Argosaronic Gulf, Greece, *Journal of Archaeological Science: Reports* 12, 805-818.

Hägg, R. 2002: Swedish Archaeology in Greece, 1894-1994, in Hägg ed. 2002, 9-13.

——— 2003: Some Reflections on the Sanctuary of Poseidon at Kalaureia in the Bronze Age, in Κονσολάκη - Γιαννοπούλου ed. 2003, 333-336.

Hägg, R. ed. 2002: *Peloponnesian Sanctuaries and Cults: Proceedings of the Ninth International Symposium at the Swedish Institute at Athens, 11-13 June 1994*, Stockholm.

Harland, J. P. 1925: The Calaurian Amphictyony, *AJA* 29, 160-171.

Hope Simpson, R. & O. T. P. K. Dickinson 1979: *A Gazetter of Aegean Civilisation in the Bronze Age* I: *The Mainland and Islands*, Göteborg.

Kelly, T. 1966: The Calaurian Amphictiony, *AJA* 70, 113-121.

Κονσολάκη - Γιαννοπούλου, Ε. 2001: Μυκηναϊκός Εικονιστικός Κρατήρας από το Μόδι της Τροιζηνίας, in Αλεξανδρή & Λεβέντη eds. 2001, 43-50.

——— 2003: Η Μυκηναϊκή Εγκατάσταση στο Νησάκι Μόδι της Τροιζηνίας, in Kyparissi - Apostolika & Papakonstantinou eds. 2003, 417-432.

——— 2007: Η Υστερομυκηναϊή Εγκατάσταση στην Ερημονησίδα Μόδι του Σαρωνικού, in Ε. Κονσολάκη - Γιαννοπούλου ed., *Επαθλον: Αρχαιολογικό Συνέδριο προς Τιμήν του Αδώνιδος Κ. Κύρου, Πόρος, 7-9 Ιουνίου 2002*, Athens, 2007, 171-198（筆者未見）.

——— 2019: Ναυτικό Εμπόριο στο Πέτρινο Λιοντάρι του Πόρου: Ο Υστερομυκηναϊκός Οικισμός στη Βραχονησίδα Μόδι, *Αρχαιολογία και Τέχνες* 131, 56-67.

Κονσολάκη - Γιαννοπούλου, Ε. ed. 2003: *Αργοσαρωνικός: Πρακτικά Ιου Διεθνούς Συνεδρίου Ιστορίας και Αρχαιολογίας του Αργοσαρωνικού, Πόρος, 26-29 Ιουνίου 1998*, Athens.

Kourou, N. & A. Karetsou 1994: Το Ιερό του Ερμού Κραναίου στην Πατσό Αμαρίου, in L. Rocchetti ed., *Sybrita: La Valle di Amari fra Bronzo e Ferro, Roma*, 81-164.

Kyparissi - Apostolika, N. & M. Papakonstantinou eds. 2003: *2nd International Interdisciplinary Colloquium: The Periphery of the Mycenaean World, 26-30 September, Lamia 1999*, Athens.

Lymberakis, P. & G. Iliopoulos 2019: Snakes and Other Microfaunal Remains from the Sanctuary of Poseidon at Kalaureia, *Opuscula* 12, 233-240.

Marinatos, N. & R. Hägg eds. 1993: Greek Sanctuaries: New Approaches, London & New York.

Mazarakis Ainian, A. 1997: *From Rulers' Dwellings to Temples: Architecture, Religion and Society in Early Iron Age Greece (1100-700 B.C.)*, Jonsered.

Mazarakis Ainian A. ed. 2011: *The "Dark Ages" Revisited: Acts of an International Symposium in Memory of William D. E. Coulson: University of Thessaly, Volos, 14-17 June 2007*, Volos.

Mylona, D. 2013: Dealing with the Unexpected: Unusual Animals in an Early Roman Cistern Fill in the Sanctuary of Poseidon at Kalaureia, Poros, in G. Ekroth & J. Wallensten eds., *Bones, Behaviour and Belief: The Zooarchaeological Evidence as a*

Source for Ritual Practice in Ancient Greece and Beyond, Stockholm, 149-166.

——— 2015: From Fish Bones to Fishermen: Views from the Sanctuary of Poseidon at Kalaureia, in D. C. Haggis & C. M. Antonaccio eds., *Classical Archaeology in Context: Theory and Practice in Excavation in the Greek World*, Berlin & Boston, 385-417.

Mylona, D., M. Ntinou, P. Pakkanen, A. Penttinen, D. Serjeantson & T. Theodoropoulou 2013: Integrating Archaeology and Science in a Greek Sanctuary: Issues of Practice and Interpretation in the Study of the Bioarchaeological Remains from the Sanctuary of Poseidon at Kalaureia, in S. Voutsaki & S. M. Valamoti eds., *Diet, Economy and Society in the Ancient Greek World: Towards a Better Integration of Archaeology and Science: Proceedings of the International Conference held at the Netherlands Institute at Athens on 22-24 March 2010*, Pharos Supplement 1, Leuven / Paris / Walpole, 187-203.

Mylona, D. 2019: Animals in the Sanctuary: Mammal and Fish Bones from Area D and C at the Sanctuary of Poseidon at Kalaureia. With an Appendix by Adam Boethius, *Opuscula* 12, 173-221.

Nordquist, G. C. 2002: A Better Time Cannot Be Found, in Hägg ed. 2002, 15-20.

Ntinou, M. 2019: Trees and Shrubs in the Sanctuary: Wood Charcoal Analysis at the Sanctuary of Poseidon at Kalaureia, Poros, *Opuscula* 12, 255-269.

Pakkanen, J. 2009: A Tale of Three Drums: An Unfinished Archaic Votive Column in the Sanctuary of Poseidon at Kalaureia, *Opuscula* 2, 167-179.

Pakkanen, P. 2008: From *Polis* to Borders: Demarcation of Social and Ritual Space in the Sanctuary of Poseidon at Kalaureia, Greece, *Temenos* 44, 233-262.

——— 2011: *Polis* within the *Polis*: Crossing the Border of Official and Private Religion at the Sanctuary of Poseidon at Kalaureia on Poros, in M. Haysom & J. Wallensten eds., *Current Approaches to Religion in Ancient Greece: Papers presented at a Symposium at the Swedish Institute at Athens, 17-19 April 2008*, Stockholm, 111-134.

——— 2015: Depositing Cult - Considerations on What Makes a Cult Deposit, in Pakkanen & Bocher eds. 2015, 25-48.

Pakkanen, P. & S. Bocher eds. 2015: *Cult Material: From Archaeological Deposits to Interpretation of Early Greek Religion*, Papers and Monographs of the Finnish Institute at Athens XXI, Helsinki.

Papadopoulos, N. G., A. Sarris, E. Kokkinou, B. Wells, A. Penttinen, E. Savini, G. N. Tsokas & P. Tsourlos 2006: Contribution of Multiplexed Electrical Resistance and Magnetic Techniques to the Archaeological Investigations at Poros, Greece, *Archaeological Prospection* 13, 75-90.

Papazarkadas, N. & J. Wallensten 2020: Religion and Family Politics in Hellenistic Kalaureia: Three New Inscriptions from the Sanctuary of Poseidon, *Opuscula* 13, 139-164.

Pendlebury, J. D. S. 1930: *Aegyptiaca: A Catalogue of Egyptian Objects in the Aegean Area*, Cambridge.

Penttinen, A. & D. Mylona 2019: Physical Environment and Daily Life in the Sanctuary of

Poseidon at Kalaureia, Poros: The Bioarchaeological Remains. Introduction, *Opuscula* 12, 159-172.

Penttinen, A. & J. Wallensten 2014: Berit Wells in Memoriam, *Opuscula* 7, 149-152.

Penttinen, A. & B. Wells with Contributions by D. Mylona, P. Pakkanen, J. Pakkanen, A. Karivieri, A. Hooton & E. Savini and with an Appendix by T. Theodoropoulou 2009: Report on the Excavations in the Years 2007 and 2008 Southeast of the Temple of Poseidon at Kalaureia, *Opuscula* 2, 89-141.

Renfrew, C. 1985: *The Archaeology of Cult: The Sanctuary at Phylakopi*, BSA Supplementary Volume 18, London.

Sarpaki, A. 2019: Plants in the Sanctuary: Charred Seeds from Areas C and D at the Sanctuary of Poseidon at Kalaureia, Poros, *Opuscula* 12, 271-286.

Schumacher, R. W. M., 1993: Three Related Sanctuaries of Poseidon: Geraistos, Kalaureia and Tainaron, in Marinatos & Hägg eds. 1993, chap.4, 62-87.

Sinn, U. 1993: Greek Sanctuaries as Places of Refuge, in Marinatos & Hägg 1993, chap.5, 88-109.

Snodgrass, A. M. 1971: *The Dark Age of Greece: An Archaeological Survey of the Eleventh to the Eighth Centuries BC*, Edinburgh.

Syrides, G. E. 2019: Marine and Terrestrial Molluscs in the Sanctuary: The Molluscan Remains from the 2003-2004 Excavations in the Sanctuary of Poseidon at Kalaureia, *Opuscula* 12, 241-254.

Wallensten, J. & J. Pakkanen 2009: A New Inscribed Statue Base from the Sanctuary of Poseidon at Kalaureia, *Opuscula* 2, 155-165.

Wells, B. 2003: The Sanctuary of Poseidon at Kalaureia: The New Investigation of 1997, in Κονσολάκη - Γιαννοπούλου ed. 2003, 337-347.

——— 2011: Kalaureia in the Early Iron Age: Evidence of Early Cult, in Mazarakis Ainian ed. 2011, 211-220.

Wells, B (edited by P. Pakkanen, A. Penttinen & J. Pakkanen) 2015: New Beginnings? Preparations of Renewal of Cult at Kalaureia and Asine, in Pakkanen & Bocher eds. 2015, 137-155.

Wells, B. with A. Karydas 2009: A Smiting-God-Figurine found in the Sanctuary of Poseidon at Kalaureia, *Opuscula* 2, 143-154.

Wells, B., A. Penttinen & M. -F. Billot 2003: Investigations in the Sanctuary of Poseidon on Kalaureia, 1997-2001, *Opuscula Atheniensia* 28, 29-87.

Wells, B., A. Penttinen, J. Hjohlman with K. Göransson, A. Karivieri & M. D. Trifirò 2006-2007 (2008): The Kalaureia Excavation Project: The 2004 and 2005 Seasons, *Opuscula Atheniensia* 31-32, 31-129.

Wells, B., A. Penttinen, J. Hjohlman & E. Savini with K. Göransson 2005: The Kalaureia Excavation Project: The 2003 Season, *Opuscula Atheniensia* 30, 127-215.

Welter, G. 1941: *Troizen und Kalaureia*, Berlin.

Wide, S. & L. Kjellberg 1895: Ausgrabungen auf Kalaureia, *AM* 20, 267-326.